

鳥取県米子市にある鳥取大学医学部におります、常世田好司と申します。

私は感染症や自己免疫疾患における、免疫学的な記憶のメカニズムについて研究を行っております。フンボルト奨学生であったのは2006年ごろで、その後もポスドクで留まり、2009年に一度帰国して千葉大学に移りましたが、その後、2012年に再びドイツへ戻り、2020年春に帰国して鳥取に移るまで、研究室主宰者（PI）としてベルリンにあるドイツ・リウマチ研究所（Deutsches Rheuma-Forschungszentrum Berlin）で7年半研究を続けておりましたので、ドイツ・ベルリンには通算11年半いたこととなります。ドイツでの生活や仕事、旅行など、皆様と共有したいことはたくさんありますが、今回は生活面でのお話をしたいと思います。

2005年に渡独した際、助教（当時は助手）として既に3年働いていたこともあり、研究面に大きな不安は感じていませんでしたし、ヨーロッパでの生活ということで不安より好奇心の方が大きく勝っていたと思います。ただ、最も気がかりなことは言語でした。英語でも不安なのにドイツ語も加わり、果たして意思疎通ができるのかと、大変悩んでおりました。昔、ドイツ・ボンに留学されていた日本の教授からは、ほとんど英語で通じるから大丈夫と言われ、不安な英語力を頼りに渡独しました。

実際にドイツに着いてみると、相手の会話が英語なのかドイツ語なのかも区別がつかず、さらに不安になった記憶があります。私が頑張っただけで覚えたてのドイツ語で Auf Englisch, bitte! とお願いすると、「私は今英語で話していましたが」と返され、大変失礼なことをしてしまったという記憶も残っています。アパートは研究所の秘書が手配してくれたおかげで何とか決まりましたが、もしこの助けがなかったらと考えると、今でもゾッとします。その次に出くわした壁が住民登録とビザです。市役所 Rathaus はもちろん、外人局もすべてドイツ語オンリーでした。私がドイツを去る時には外人局に英語を話せる人が増員されていましたが、その当時はどの受付のドイツ人も英語が話せなかったもので、絶望的になりながら、3往復してようやく取得できました。その時の一番の問題は、外人局で住民票がないと言われ、市役所ではビザはあるのかと聞かれたことで、その当時はその矛盾に気づかず、悩んでいたように思います。入国して、住居・ビザ・住民票のトップ3の壁を乗り越えた後、Morgen! Danke! Bitte! Bis morgen! Tschüß! Das! Drei personen! Bitte Zahlen! Gesundheit!（誰かがくしゃみをした時）などの少ないドイツ語のみを使いこなし生活していました。Was ist das? と聞いてしまったものなら、ドイツ語のシャワーを浴びることになることが見えていたので、ドイツ語から逃げる日々だったと思います。2回目の渡独の際には、子供を保育園に入れるために、ドイツ語が必須になりました。しかし、妻（日本人）がドイツ語を話せたために、ドイツ語習得を再び先延ばしにしてしまいました。100%甘えではありますが、今から思えば、早くにドイツ人の親友を作れば良かったと思っています。その頃ベルリンには、旧東と旧西の出身者が入り乱れておりましたが、旧東出身者とは話が合うことが多く、ノリも日本人に似ていた印象があります。しかし、ドイツ語の壁と、ともに英語が苦手ということもあり、長い会話にならなかったことを今更ながらに後悔しています。

2020年にコロナ禍が始まろうとするとき、日本に帰ってきました。私の中で、いろいろな考え方が変わり、また生まれていました。まず、日本にいる外国人に優しくなったこと、「おもてなし」が社員への荷重ストレスに映ってしまうこと、人生はストレスなく楽しく生きてれば良いのではと悟りのようなものを得たこと、などいろいろありました。ドイツにいたほうが幸せだったのか、日本に帰ってきて幸せだったのか。また無理ではありますが、仕事はドイツ、生活は日本のようなことができれば良かったのか。コロナ禍で2年以上ドイツに行けなくなったことが、そういう思いをさせているのか、まだわかりませんが、日独おのおのの良いところを実現できる社会になればなあと思う、今日この頃です。